

1) ぶどう園の主人と農夫のたとえ

本日与えられた福音書の箇所では、イエスは「ぶどう園と農夫」のたとえを語っています。これは、祭司長、律法学者、長老たちに語られた言葉です。この当時、イエスが人々に神の証をするその姿は、周りの人々に大きな影響を与えていました。それはイエスの言葉を信じて従う人にとっては良い影響で、心を突き動かされて神を仰ぐという方向に、一方で、祭司長、律法学者、長老たち、つまり社会的に権威のある人たちにとっては、自分たちの立場が脅かされて、不安を煽るという方向に向いていました。彼らはイエスに敵対する立場を取り、どうにかしてこのイエスを追い出したい、殺してしまいたいと考えていました。そんな彼らにイエスが語ったのがぶどう園のたとえ話です。

ある人がぶどう園を作りました。ぶどう園の主人(持ち主)となったその人は、ぶどう園を作り、垣を巡らし、絞り場を掘り、見張りのやぐらを立てて、農夫たちに貸してから、その場を離れました。これはただぶどうを育てて収穫するための場所ではなく、ワインを作るための場所です。ワインを作るための設備は、すべて主人が完璧に整えてくれたものでした。

12:2「収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った」。

ぶどうを収穫してから熟成させる期間もありますから、ここで言われている「収穫の時」というのはぶどう園を貸し出してから数年経った頃です。ぶどう園の主人から農夫たちにコンタクトがありました。収穫を受け取るために、僕が送られたのです。しかし農夫たちは、僕に収穫の取り分を渡すのではなく、暴力を振るったのでした。主人は自分の取り分が得られなかったで、また別の僕を送りました。しかしその人も、また次の僕も、さらにその次の僕も、殴られたり、侮辱されたり、殺されたりしました。おそらく農夫たちは、ぶどう園を任されていた間、怠けて働かずにはいたわけではありません。彼らはぶどうを育てて、収穫し、熟成させてワインとして売り、人々からお金を受け取っていました。その利益のすべてを自分たちのものにしようとしたのです。「主人」という言葉は「持ち主」という意味を持ちます。ぶどう園の持ち主は、最初にこのぶどう園を作った人なのです。農夫たちにとって、本来そのぶどう園は預かり物だったのでした。

このたとえ話において、ぶどう園の「農夫」とはイエスラエルの民、あるいはこの時イエスと話している権力者たちのことです。「ぶどう園の主人」は神さまをさしています。神さまが何度も送ったという「僕」は預言者のことです。

旧約聖書の時代を振り返りますと、神さまが遣わした預言者たちは、いつも蔑ろにされてきました。

エレミヤ書7章25節、26節にはこうあります。「お前たちの先祖がエジプトの国から出たその日から、今日(こんにち)に至るまで、わたしの僕である預言者らを、常に繰り返しお前たちに遣わした。それでも、わたしに聞き従わず、耳を傾けず、かえってうなじを固くし、先祖よりも悪い者となった。」

預言者。神の言葉を預かる者たちの言葉が、蔑ろにされてきたという歴史。これは、人々が神の言葉を受け入れなかった歴史でもあります。

2) ぶどう園における主人の取り分

このたとえ話の中で唯一、ぶどう園の主人が言ったセリフがあります。「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」。神の愛する一人息子、イエス・キリストのことです。「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」。普通は、そんな考えにはなりません。愛する息子ならこれまでさんざん 遣いの者たちに危害を加えてきた農夫たちのところへなんて行かせたくない、大事な息子だからこそ、傷つけられたくないと思うのが親心かと思います。しかし主人は、息子を遣わしました。

なぜ、息子を送ったのか。ぶどう園の収穫の、主人の「取り分」を得るためです。取り分というのはワインを売って得たお金のことではありません。場所を貸し出し、働いてもらってワインを売って得た利益のうちの何割かをオーナーである自分が受け取る、これが正常な関係ですよね。主人は農夫たちと正しい関係に戻りたかったのです。主人が本当に求めていた「取り分」とは、良い関係を築くことでした。

旧約聖書の時代、人々は神さまとの関係を保つために「生け贄」というものを捧げていました。牛や羊、ヤギなどの多くの動物が捧げられてきました。神に、自分の罪を赦してもらうための犠牲として動物の血を流していたのです。また、アブラハムは神さまから自分の息子イサクを捧げなさいと言われて、捧げようとしていました。子どもを大切にしていなかったという話ではありません。アブラハムはそうまでしてでも、神さまと「良い関係を結びたい」と願ったのでした。私だったら、神さまから「息子を捧げろ」と言われたら、正直断ってしまうと思います。今は、私たちは動物の生け贄を捧げていません。なぜなら、イエス・キリストが最後の生け贄になったからです。十字架の上で流されたキリストの血が、全ての罪を清めたのです。

私はお寺でお坊さんをしている友人がいるのですが、その人から、こう言われたことがあります。「仏教では愛を執着だと考える。だからその文脈では、愛というのはあまり良いものではない。キリスト教の愛は優しく包み込むような感じがあって素敵だね」と。確かに神さまの愛というのは、とにかく優しく、全ての罪を包み込むような包容力があると思います。けれども私は、その一方で、キリスト教の愛も、執着あるいは執念という言葉に近いものなのかもしれないと思う時があります。それは決して悪い意味ではなく、ものすごく執念深い、苦しいほどの、痛ましいほどの愛を無償で神さまが注いでくれたのだということです。言い換えると、しぶとい、忍耐強い愛情です。ただただ優しく包み込む愛情だけでは残酷な農夫たちのもとに愛する息子を送るはずがないと思うのです。一人息子を送ってでも、たとえその息子が傷つけられ殺されるリスクがあったとしても、それでも私たちと良い関係を結びたい、そうした忍耐強い愛情があったからこそ、「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」と、愛するイエスをこの世に送ったのでした。人々に対して、神さまの取り分、つまり、心を神さまに向けることを求めていたからです。神さまが愛する息子をこの世に送ったのは、それほどまでに人々と「良い関係」になりたいと願い、和解を求めていたからでした。信頼を何度裏切られたとしても、期待することをやめなかったのです。

3) マルコによる福音書のなかのたとえ話

聖書の中に、イエスがたとえを用いて話す場面というのは多く記されていますが、マルコによる福音書の中には、実はイエスのたとえ話は大きく分けると2箇所しか出てきません。一つは、4章の種を蒔く人のたとえ、そしてもう一つが、このぶどう園と農夫のたとえです。

種を蒔く人のたとえは、イエスを信じる人たちに向けて語られました。蒔かれた恵みの種が、岩だらけの土地や茨の道に落ちてしまったら、実らないけれども、良い土地に落ちたら、あるものは百倍もの実りをもたらす、という話です。私たちの心が土地だとしたら、良い土地になって、恵みの種をいただいて、良い実を实らせたいという話です。一方で、ぶどう園のたとえは、祭司長、律法学者、長老たち つまりイエスに敵対する人たちに向けて語られました。「主人の送った僕、つまり預言者たちの言葉を大切にしていなかったのはあなたたちですよ、侮辱したり殴ったりしてきたのはあなたたちですよ」と、彼らを責めるような言い方をしていますが、伝えたいことは、実は種まきのたとえと共通するところがあります。土地やぶどう園にたとえられた、私たち人間の心をきちんと管理してくださいねということです。つまり、イエスは自分を信じる人にも、また自分を敵とみなして殺そうとする人たちにさえも、同じように「神の言葉を受け入れる心でありなさい、神に心を向けなさい」と願い、語りかけていたということです。

4) 私たちの人生という「ぶどう園」

このぶどう園は、私たちの人生を指している、というふうに読むこともできます。ぶどう園の主人は神であり、主人が最後に送った、愛する息子はイエス・キリストです。この場合、農夫は私たちです。私たちの持つものはすべて神さまが与え、整えてくれたものです。私たちの体も、命も、時間も、そしてこの歩み、人生も、すべて神さまに与えられたものです。これは本来、私たちのものではありません。神さまからの「預かりもの」です。持ち主は神さまだということです。それなのに、私たちはつい「自分のものだ」という気持ちになります。そんなとき、神さまからの、良い関係への招きを、拒んでしまうことがあります。心が神さまから離れてしまうことがあります。それでも神は、神の言葉を蔑ろにする農夫のような私たちに、何度拒否されても、希望を捨てることはありません。

「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」。この言葉には、「わたしの息子を敬ってほしい」という神の願いが滲み出ているように思います。神が人に対して切に望んでいること、それは、ぶどう園の主人が農夫たちに求めた「取り分」と同じです。「良い関係を築くこと」として「心を向けること」です。何度裏切られても、見捨てることをせず、希望を捨てず、最後に私たちのところに送られたのは、愛するひとり子、イエス・キリストでした。私たちは、キリストの十字架とその恵みによって赦されて やっと神と良い関係を築くことができましたのだ。」

5) 八端十字、悔い改め

12:9「さて、このぶどう園の主人はどうするだろうか。戻ってきて農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない」イエスの語るたとえ話の結末では、「主人は農夫たちを殺してしまう」となっています。一見、イエスに敵対する人たちに対して、神が裁きをくだすと強く伝えているようにも受け取れます。イエスのたとえ話の中の「主人」はそうでしたが、では、実際の神はどうだったのでしょうか。この世に送られた、神の愛する一人息子は、他の預言者たちと同じように、蔑ろにされてしまいました。イエスを信じる人もいましたが、イエスに敵対する人たちの声も勢いも大きくなった時、殴られ、侮辱され、十字架につけられて血を流し、死んでいきました。

東方教会でよく見られる十字架に、八端十字(はったんじゅうじ)というものがあります。私たちの教会にあるような縦横の棒の十字に加えて、イエスの頭の上に、短い横棒が一本、さらに、イエスの足元にナサメの棒が一本加えられたものです。イエスの頭の上の横棒は、罪状書きです。イエスは「ユダヤ人の王」を自称したということにされて、裁かれていまし

た。そしてイエスの足元のナナメの棒は、その両脇で十字架に付けられていた人たちの信仰をあらわしています。

ルカによる福音書 24:39-43: 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるとときには、わたしを思い出ししてください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくれ、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。

イエスの十字架を真ん中にして、左には、イエスを侮辱した人。右には、最後の最後で信仰を告白した人。このナナメの棒は、人間の罪深さと、悔い改めることの大切さを伝えるためのものだと言われている。けれどもこれは、おそらく悔い改めないと裁かれますよと言っているわけではありません。それだとただの脅しになってしまいます。そうではなく、私は「こんな人をも主イエスは愛してくれたのだ」と伝えているように思うのです。悔い改めるとは、神さまの方に心を向けるということです。イエスの両脇で十字架についた人たち。最後に悔い改めた人と、イエスを最後まで侮辱した人。私たちは、このどちらにもなりうるのです。

神さまにまっすぐ心が向いている時もあれば、神さまのことなど忘れて、自分のことばかり中心に考えてしまう時もあります。ぶどう園の農夫のように、自分の命を自分のものと考えているのです。神さまのことを私たちの持ち主であることを忘れているのです。神さまを「主人」だと考えられないのです。神の子イエスを敬っていない時があるのです。そんな私たちであったとしても、イエスは救いたいと願っているのです。別の箇所(ヨハネ 12:47)でイエスはこのように言っています「私がきたのは、世を裁くためではなく、世を救うためである」。

イエスは、自分に敵対する人たちに対して、ぶどう園のたとえを語りました。しかも厳しい内容を語りました。それは、話を聞いて振り向いて欲しかったからではないでしょうか。救いたいからこそ語ったのです。たとえ話の中で「主人は農夫を殺す」と語ったのは、実際にはそうならないでほしい、目を覚まして神の方を向いてほしい、悔い改めてほしいというイエスなりの警告だったのかもしれない。

私たちは、神の言葉に聞き従って歩むときもあれば、神のことを忘れて、自分自身、この命や人生を自分のものとして歩んでいるときもあります。しかしイエスを敬えないような時、侮辱し、傷付けてしまう、そんな私たちをも救うために、救い主イエス・キリストがこの世に産まれました。愛する一人息子を私たちのもとに送ってくださった神さまは、今この時にも、私たちと良い関係を築くことを求めています。心に向けてほしいと願っているのです。その願いに応え、神さまを主人とする歩みを進める者でありたいと思います。